

胸

劇団シェーブールドールの公演は清水邦夫の戯曲『思い出の日本一万年』に決まり、稽古もそろそろ本格化し始めた。

闇の中に卒塔婆が山のように積まれ、父親と二人の息子が、死んだ息子サブローの卒塔婆を探しているうちに花子と名乗る女性と出会い、サブローの思い出を語り始める。そして花子は、血を流して舗道に横たわっていたサブローの臨終に立ち会ったことを語りの中で明かす。この四人以外にも何人も男女が、さまざまな境遇で虐げられ傷ついてきた過去に対する呪詛めいた言葉を吐きながら卒塔婆の山の中をうごめく、と進行していく戯曲であり、場面転換はない。

卒塔婆は単に舞台装置というよりも主題を象徴する重要な役割が課せられているだけに、数多くを調達しなければならない。笹尾昭人は大道具係の滝口と寺に向かった。

昭斗と同じ専門学校生の山本左枝が次回公演で主役に抜擢されたのだから、昭人は一段と張り切っていた。左枝が主役として、しかも花子と狂女という二役をどのように演じ分けるのだろうか、と楽しみで仕方なかった。

「あっ、あぶない」

昭斗は軽トラックのブレーキをあわてて踏んだ。話に夢中になり、前方で横断しようとしていた自転車の老人に気づくのが遅かったのだ。

間に合いそうにないタイミングだった。引きつった老人の顔がその深い皺までありありと見えた。が、当たった衝撃は無かった。助手席を見ると、滝口もシートベルトを着用していたのでフロントガラスに投げ出されることなく、しかし、緊張しきった表情のままだった。

「いやあ、あぶなかった。ほんと、助かった。これも、お寺に向かうわれわれに対する仏様のご加護ですかねえ」

ようやく昭斗が言った冗談もごちなかった。まだ動悸は収まっていなかった。自転車の老人は、既に道路を悠々と渡り終えており、何事も無かったかのようにだった。

稽古が本格化してきた。しかし、左枝にいつものきらめきはなかった。

舞台の微細な流れを鋭敏な感性で捉えて増幅させ、その流れに周囲を自然と巻き込んでゆくような左枝の特質が一向に現れてこなかった。

その日の稽古が終わったあとで、演出の古坂は左枝に質問を投げかけた。

「左枝、何か気にかかっていることはないか？もしかしたら、終盤の場面かな」

なんとか自分だけで乗り越えなければ、と思っていた左枝だったが、古坂の言葉にすがりたいという思いが、このときふっと頭をもたげた。

「やっぱりこだわりがあるかなあ、花子の、その下着姿というか、犯された感じが出てくる場面が」

原作のト書きには『花子がひきずられるようにして運ばれる。花子の姿は乱れており、ブラジャーのひもが千切れとび、身体のあちこちに血が滲んでいる』とある。

「いえ。あの場面は、卒塔婆の山が急に法廷に変わり、原告になった花子が比留間花子と

いう名前を明かして、アメリカ兵に暴行を受けたときの様子を訴えるわけですから、そういう格好もありかな、って思っていますけど」

こだわりがあるとしても当然か、と古坂は思った。

二十歳になったばかりの女性が、演劇の流れの中でとはいえ、観客の前で素肌をさらすことに抵抗がないはずがない。この戯曲『思い出の日本一万年』は一九七〇年初演だから既に五十年を経過して著作権も切れており、原作者も昨年没している。だから、ト書きどおりに演出しなくても別段の問題は起きないだろう。暴行された花子というイメージを前面に押しださない演出は可能なんだろうか。

しかし、権力や大衆によって虐げられてきた人間、とりわけそうした女性を象徴する出来事として、沖縄の基地問題をあいまいにすることはできない。二重三重におとしめられ辱められてきた現実を、花子を汚すことなく観客に訴えかけることが果たしてできるだろうか。いや、いや、やはりこの際、妥協してでも左枝の演じやすいようにしてやろうか。

周囲からは「鬼の演出」とまで言われている古坂だったが、少し弱気になっていた。

ところが、左枝からは意外な言葉が返ってきた。

「ブラジャーが切れて胸が出ている、って、なんか、お芝居の約束事みたいで、かえってリアルでないというか…花子は犯されたわけですよ。とすれば、むしろ下半身がむき出しにされているようなむごたらしいシーンなんじゃないか、とわたしは思うんです。それなのに、お芝居の約束事として胸を出しても、かえって観客はハイ了解、とお手軽に見てしまい、胸が大きいだの小さいだの、そんなことまでよけいに考えてしまわないですか？」

そこまで割り切れるものだろうか、と古坂は少し慌てた。

「何を言い出すかと思ったら…きみの言うことは正論だと思うよ。だからって、舞台上で下半身をむき出しにすることなんかできないに決まっている。もしかするときみは、汚れ役がしたくないから、脱ぎたくないから、そんな極論を持ち出してきたのかな。もしそうだとしたら、もっと言いたいことを正直にぶつけ合ってみないか、そのほうがこっちもきちんと対応できるから」

冷静さを失って少し言い過ぎた、と古坂は思った。脱ぎたくないために左枝が難癖をつけてきている、と決めつけたように受けとられかねない。

そういう気持ちで言ったのではないんだ、と古坂は言い改めようとした。しかし、その時間を与えないほどに素早く、左枝は

「失礼します。もう一度考え直してみます」

と、イスから立ち上がった。いつもは丁寧過ぎるくらいに礼儀正しい彼女がちょこんと頭を下げると同時に背中を見せて足早に去っていく様子に、古坂は取り返しのつかない発言をしてしまったか、と唇を噛んだ。

その夜、左枝は昭斗に、今から会えないか、できれば昭斗の部屋に行きたいとメールした。昭斗のバイトがそろそろ終了する時刻だった。

これまで二人は部屋を行き来しなかった。初対面の時から互いに話しやすく、写真専門学校同期生として刺激し合い励まし合う関係に心地よさを感じていたので、異性としての感情を差し挟みたくなかったのである。

もっとも、左枝が住んでいるのはセキュリティの完備した女子学生向けのマンションな

ので昭斗が行くことは叶わなかったろうし、昭斗の部屋は女性が来るにはあまりに殺風景な安アパートだったのである。

よほどのことがなければこうしたメールを左枝は寄こすはずがないので、昭斗は自分のアパートの最寄り駅を教え、迎えに行くことを約束した。

駅から昭斗の部屋に着くまでの間、左枝は今日の古坂とのやりとりを詳細に伝えた。実は、台本が劇団の全員に配られて配役が発表されたときから、昭斗のいる制作部でも、左枝の主演抜擢は話題になっていた。花子と狂女という二役をどのように演じ分けるのか楽しみだった。しかしそれ以上に、最後の場面における花子の衣装に関して話題が沸騰していた。だから、今聞かされた古坂との会話の成り行きにも、昭斗は少しも驚かなかったのだが、こういう場合はよい聞き手に徹するのが悩みを解消する手立てとして有効だという判断から、左枝の話す一つ一つに少し大袈裟くらいに相槌を打った。

部屋に着いた。

「コーヒーでも飲む？きょうは三種類のコーヒーを用意してある」

「えっ、昭斗はそんなにコーヒー通だったんだ」

「いやあ、どれもインスタントコーヒーだけど、三社で微妙に味が違うんだ」

左枝はくすくすと小さく笑った。やった、これで慰めの出だしはOKだ、と昭斗は頬をゆるめた。

「ありがとう昭斗。でも今日はビールとかがいいんだけど」

「ビールと言ってもなあ」と言いながら、昭斗は、リサイクルショップで買った冷蔵庫から缶ビールを二本取りだした。プレミアムを超えるという仰々しいCMで売り出されている第三のビールだった。二人はコタツに入り、片やベッドに片や本棚に寄りかかって足を伸ばし、プルトップをプシュッと開けた。

「わたし、自分でも今の演技はうまくいってないと感じてるから、古坂さんがいいアドバイス、してくれと思ったのに」

「脱ぐ脱がないの話をされちゃったってわけだ」

「そんなの、わたしにとってはどうでもいいことなのに…」

と言いながら、左枝は一気にビールをあおった。

「でも、古坂さんは古坂さんなりに、そのことを気づかったんだと思うよ」

「そりゃあ、ありがたいわよ。ありがたいけど、というか、人前でオッパイ見せるのもそれなりに抵抗は、ないと言えはウソになるし」

左枝の口からオッパイという言葉聞いて、ビールの酔いも手伝って昭斗は左枝のセーターの胸元をちらっと見てしまった。

「あっ、昭斗、今、見たでしょ」

「見てないよ。だいいち、おまえ、両手をコタツに突っ込んでいるから、こっちからはフツンのへりしか見えねえし」

「そうか。…そうだ、そうだよ」

「当たり前だよ。オレはおまえにやましい気持ちなんか、持ってないから」

「違う違う、そうだよねって言ったのは、観客にオッパイ見せる前に、わたしの大切な人に最初に見せるべきだよねってこと！」

うなずいていいのかわるいのか、大切な人とは自分のことを言っているのか、昭斗は混

乱した。ごくっとな唾を飲む音が聞こえてしまったかもしれない。

「昭斗、今夜見てもらっていいかなあ」

頭を少し冷やそうと昭斗は立ち上がった。そして冷蔵庫からもう一本ずつ取り出した。ビールをさらに飲むとどういう展開になってしまうのだろうか、その先を考える冷静さは昭斗には無かった。

「脱ぐ脱がないの話は古坂さんの見間違いだとして、左枝の悩んでいることって、もしかして、花子と二役で演じる狂女のほうと違うか？」

「えっ、どうして」

「だって、左枝はコンタクトダンスのレッスンで演劇に目覚めたんだろ。ほら、いつか、学校のCスタジオで、オレを相手にやってみせてくれたじゃん。あのとき、そっかー、こうやって相手のほんの小さな力とかを感じてそれに合わせるように身体を動かしていくと、今度は相手がそれを感じとってくれて、そうやって一つの流れが出来てくるんだ、と感心しちゃったんだよ。きっと左枝は、芝居でも、直前のセリフやしぐさをしなやかに受けとめて一つの流れをつくり出して、次の人に渡す、それが共演している人すべてにとって気持ちいいことなんだろうな、って思ったんだ。だから、左枝の出る芝居は共演者も生きるし、観客にも感動が伝わる。でも、狂女は違うじゃん」

二本目の途中まで空けてアルコール量がちょうどよかったのか、昭斗はいつも以上に饒舌になっていた。左枝が、気のせいかうっすら涙を浮かべて聞いてくれているのも、饒舌に拍車をかけた。

「狂女って、周りの人とは全然関係ないこと喋っているだろ。というか、『思い出の日本一万年』という台本は、卒塔婆の周りを這いずりまわる男も女も、自分の恨みとか苦しみとかを勝手に喋ってるという感じだろ。流れを受けとめ、感じて、手渡すというのが得意な左枝にとって、一番苦手な芝居なんじゃないかなあ」

「昭斗、ありがと」

左枝は本当に涙を浮かべていた。

「自分がつっかえていたのはそこだったんだ」

左枝は昭斗の言葉によって、目の前に重く立ちこめていた霧が少しずつ晴れてきたのを感じた。そうか、直前のセリフを受けとめ、次のセリフへと感情をつないでいく必要はなかったんだ。

だとすれば、後半になって狂女が「ととさま、かかさまありながら子の道もわきまえずかかる死をとぐるこ、必ず必ず人情なきと思召下されまじく」と言うのも、自分の中に湧いてくる感情のままに吐き出せばいいんだ。

「狂女が昔のコトバで突然喋るのは変だけど、大凶作の口減らしで身売りされた娘が女郎屋で若くして病気で死んでしまうとか、親類縁者の言うがままに嫁に行った先でひどいDVにあって誰にも相談できず川に身投げして死んでしまうとか、そんな不幸な女性たちが狂女に乗り移って呪いの言葉を発しているというふうに解釈できるんじゃないかなあ」

時代劇好きの昭斗は、江戸時代の不幸な女たちを思い浮かべながら言った。

「そうか、そうだよ。わたし、今からすぐにうちに戻って、セリフの練習を一からやり直してみるよ。昭斗、ありがとう。じゃあね」

「えっ、オレに大事なものを見せてくれるって言ってたんじゃなかったのかい…」

昭斗の言葉は左枝には届かなかった。昭斗は左枝を駅まで送っていった。